

平成23年度

第2回 鶴岡地域審議会
会議録（概要）

期日：平成23年8月1日（月）

場所：鶴岡市役所 議会委員会室

鶴岡市役所 601会議室

平成23年度 第2回鶴岡地域審議会会議録（概要）

○ 日 時 平成23年8月1日（月） 午後1時30分～

○ 場 所 鶴岡市役所 3階 議会委員会室

○ 出席委員（五十音順）

五十嵐吉右衛門、五十嵐寅吉、五十嵐松治、稲泉眞彦、後藤輝夫、今野利克、
今野毅、齋藤春子、佐藤正廣、荘司正明、高山利幸、竹内峰子、茅野進、
早坂剛、本間孝夫、本間昭志、三浦惇、山田登

○ 欠席委員（五十音順）

阿部和博、早坂裕子

○ 市側出席職員

企画部長 秋野友樹、地域活性化推進室長 吉住光正、地域活性化推進室係長 三浦裕美、
地域活性化推進室主任 飯野剛、地域活性化推進室 進藤希世加

- 1 開 会 （午後1時30分） 進行：三浦地域活性化推進室係長
- 2 あいさつ
- 3 協議事項
 - （1）これまでの議論のまとめについて（資料1）
 - （2）その他
- 4 分科会
 - ・地域コミュニティ分科会（3階議会委員会室）
 - ・産業経済分科会（6階601会議室）
 - （1）各協議テーマの具体的な方策について
 - （2）その他
- 5 閉 会

1 開 会 （午後 1 時 3 0 分） 進行：三浦地域活性化推進係長

2 あいさつ

鶴岡地域審議会会長 早坂 剛

皆さんこんにちは。8月になったら暑くなった感じがいたしますけれども、朝晩の涼しさもちょっとこう異例かなと思いますけれども、この審議会も、昨年からは始まりまして、今年度は1回行っておりますが、あと残すところもう2回ですか。になってしまいました。と言いますのは、これから、まとめに入らなければいけないというところから来ておりますので、どうか今日の審議も、後で分科会もございますので、ぜひひとつご提言のほど、よろしくお願ひ申し上げて、簡単ですけども、挨拶に代えさせていただきますと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

3 協 議

(1) これまでの議論のまとめについて（説明：吉住光正地域活性化推進室長）

○ 早坂剛会長 事務局から今までのまとめを提案していただきました。1番から4番までがコミュニティ分科会、5番6番が経済分科会のテーマでございます。まず、全体会で、これについて皆さんからご意見、受け賜わりたいと思います。このコミュニティだけでなく、今のこのまとめのことや別のことでもいいです。

○ 齋藤春子委員 進め方の内容について、これは鶴岡地域の審議会ですから、それを市長に提言していくということは、他の地域もそれぞれの立場で市に提案するという形になりますか。鶴岡市としてのまとまりはなくて、地域ごとで進めるということでお聞きします。

○ 吉住光正地域活性化推進室長 6地域審議会それぞれテーマを持って進めるということで一斉にスタートし、今、各地域でも一生懸命議論をしております。最終的にスケジュールを合わせ、6地域審議会と一緒に市長への提言ということになります。内容は、それぞれ地域にあった特性を踏まえた意見が出でおりますので、統一はせず報告をいたします。

○ 早坂剛会長 共通するようなこともあると思います。それから、その地域の特性、特色も出ているのではないかと思います。すり合わせということもやらなくてもいいですか。

○ 吉住光正地域活性化推進室長 事務局としては全体の進捗管理を行いながら、それぞれ、テーマ、サブテーマを設け、現状と課題、提言の主旨、具体的な解決策、施策という提言の同じ形式でやることに統一しております。内容は、それぞれの地域審議会の自主性、独自性、地域性がございます。特に地域審議会同士で意見を調整して提言するという事は、独自にテーマを決め、意見もそれぞれの地域の意見ですので、独自性を重視し全体の調整は考えておりません。

○ 早坂剛会長 よろしいですか。また何かありましたら、後でご意見を承ります。

○ **三浦惇委員** 今回の関係で、総合計画、その後には実施計画が出来ていますが、その辺との整合性はどうなっていますか。年次計画もありますので。

○ **吉住光正地域活性化推進室長** 総合計画については既に策定済みです。各項目ごと満遍なく大きい方向性を出しているという捉え方で進めておりますので、実際は、総合計画実施計画で、具体的な市の施策については毎年度ローリングをするという考えですので、今回の地域審議会での意見は、総合計画の実施計画あるいは予算に反映するという事で考えていただければと思います。

○ **稲泉眞彦委員** 観光に関わることです。今回で2回目なので、今までの経過は分かりませんが、8ページに地域の観光・産業・文化の活性化とあり、課題と提言の方向と見た時に、いつも感じていることです。山王町に住んでいるので、今日ここへ来るにあたって自転車で来ましたが、夫婦連れや友人で観光している人は、10年前に比べてたらものすごく多くなりました。藤沢周平先生の小説映画などの影響が非常に多いと思います。山王町の通りから「まちキネ」に抜けるところで、松尾芭蕉の遺跡を巡るということで人がいっぱいいます。そういう人から何度も言われた大切な事があります。非常にいい町だけど交通が怖い、交通マナーが非常に悪いと言います。これが観光客だけでなく、私の兄弟も交通マナーが悪いし車が止まってくれないと言います。車の方が優先している社会なのだとも言います。ここの町は城下町ですから、当然道路が必ずしも真っ直ぐではないし、狭いですが、そういう意味で、ここの中で載っていないのではないかと思います。住んでる我々が、お客様をもてなすという気持ちがなければ、どんな施策やお金をかけても難しい。大事なことはリピーターです。鶴岡へ行って良かったので行って来いとか、面白い、楽しい、美味しい、とても親切だったとかが大事なことではないのか。そういう意味で言うと「もてなしの心」でしょうか。例えば、ハワイ等に行くと、あれだけの人が居ても車道に足を踏み出すと、止まってくれる車が圧倒的に多いのです。本当にいい国は、車道に片足入れたら止まらなければならないことが、本当の先進国だと聞きます。そうすると鶴岡は、なかなかそのホストが生きていない。松尾芭蕉を探して来た人達が怖い思いをし、道路半分近くを渡っているのに車が突っ込んでくるような住民では観光は成り立たないでしょう。交通マナーとともに人の心を我々が変えていかなければならない。こういう市民運動は他の施策に比べると、あまりお金がかからないと思いますので、ここに載せてはどうかと思います。

○ **早坂剛会長** これはとてもいいことだと思いますから、産業経済分科会でも取り上げて参りましょう。東京でふるさと会というのがあり出席させていただきました。稲泉委員の話の中で、観光客の人たちへの対応の仕方とありましたが、前に物産館のほうにボランティアの観光ガイドさんが居たような気がしましたが、というのは、列車、飛行機、バスで来て、二次交通の足や案内がすごい悪いという事でした。それと観光案内をしてくれるような、お迎えをしてくれるような人が、鶴岡の駅前にいないということ、なんとか改善してくれないかと、ふるさと会の皆さんからの要望を受けました。この場で話しあっているのか分かりませんが、営業が目的ではなく、あくまでもボランティア的な感じ、ボランティアだとしても、それはどういう形で、ある程度、対応したバックアップが出来るのかは分かりませんが、そういうことが、是非ひとつ鶴岡で考えてくれないかと言われたので、我々の部会でも

話し合いたいと思います。関連しまして、ボランティアという方、若い方がなかなかいないと思うので、主婦の方とか、それからリタイアしたような人とか、そういう方々にやっていただけるとなると、コミュニティの部分でアイデアが出てくるかと思いましたが発言させていただきました。

○ **本間孝夫委員** 今回の審議会の今までの議論のまとめ1と2、防災意識という非常に重要なテーマです。昨日配られてきた議会だよりも何人かの議員さんが、防災の見直しという質問を結構されていたような気がしたのですが、私も防災の意識のまとめで、鶴岡市で想定されている、今、ネットで水害のハザードマップが、危機管理課で作っているすごい立派な資料が見られます。あの資料を見て本当に日常の暮らしに活かせるかという、ほとんど目に触れないだろうと。今回の震災で情報がどう伝わるかということが、非常に一番大きい問題だったと認識しています。宮城と岩手で気象庁で出す津波の高さ当初5～6m位という情報が流れ、それだけ聞いて安心し、そんなに高いところに逃げなくていいだろうと非難した人が、第2報を聞かない方が70%だったという新聞記事を一週間前に見ました。第2報も情報としてしっかり伝わっていたら、あれだけの大きい人災がなかったのかと思いましたが。まとめとして是非考えていただきたいのは、鶴岡で今、予測、想定される災害で水害のハザードマップは、赤川の堤防の決壊というところを多分想定して作られていると感じてますが、それ以外に地震がどう起きる可能性があるかと言うと、遊佐から藤島まで伸びている庄内平野の東緑活断層と、庄内沖、秋田沖、新潟沖に3つぐらいの海底の断層があり、それが同時に起きたらマグにニュード9以上の地震が起きるだろうと想定している学者もいます。これから防災の市民向けの何かをつくる場合、一体鶴岡ではどういう災害が予測されているのか地震、津波、水害、大きい被害をもたらすこの3つを、今出ているデータでは、千年に1回とか、何百年後に0.何からせいぜい6%となっていますが、鶴岡市で出した水害のハザードマップも平成17年ぐらいのデータのようで、それを今の東日本大震災後の、いろんな活断層が動き出しているのを含めて見直しをした上で、どういうことが予測されるのか、鶴岡市のこのあたりでの津波は心配ないとは思いますが、宮城、岩手でも誰も想定していない事態が起きています。どう見直しをかけようとしているのか、もっと市民が分かりやすい防災計画、防災の対応の仕方というものが、立派でなくてもいいので、鶴岡で考えている災害と、それからどの程度の被害が予測されるのかという目で、もう少し高齢者の人が分かるような資料が、もし仮にまとめられていけば、今回の審議会の1と2ぐらいのテーマの中の、非常に重要な位置づけなのかと思えます。新潟の三条市で結構大きい被害、予測しない大被害でしたが、2004年の教訓でしっかり予測され対策が立てたれ、今回非常に生きて人的被害は出さないで終わったということが昨日の新聞に大きい見出しで出ていました。過去に起きている、いろんなデータやこれから予測されるデータを整理し、分かりやすいものが家庭に一冊配られると、当然この中には節電、節水、いろいろこれからのエコ生活の提案とか含めて出されたらいいのかと、この資料頂いた後に考えてきました。

○ **吉住光正地域活性化推進室長** 大変貴重な提言です。各委員の方から防災関係について、今後の議論のテーマやご意見を頂いておりますのでご紹介します。後藤委員から地域コミュニティの役割、連携と見直し、地域防災力の向上の中での情報伝達、消防団員の地域リーダー教育、非常時の組織育成、回避可能な通路の点検、確認という点をもう少し議論をする必

要があるのではないか。茅野委員からは防災計画が市民に配布されているか。あれば検討したい。齋藤委員からは今回の災害を受けて、防災訓練とかで機能的に変わった点があれば聞きたい。本間委員から今の震災を受けて、どういうハザードマップ、防災マニュアルがあれば公表していただきたい。事務局で危機管理課から震災を受けて、今の対応状況とこれからの状況について聞きましたので、皆さんにお知らせいたします。地域防災計画については、この震災前、昨年度より既に災害時の避難場所、その時に対応する組織の見直しを進め、関係部署で協議を重ね、また、旧市町村の合併で各地域のものが残っていたため一つの防災計画にした経緯があり、去年から見直しは進めていたとのこと。ただ、今回の東日本大震災の被害状況を受け、更なる作業、見直しが必要だという認識は持ち、作業も現在進めておりますが、重点的に考えているのは津波です。津波対策については、検討を深めるため、津波の避難場所、避難路の見直しを地域と一緒に考えていきたいということで今進めております。ただ、いつ出来るのかは、市単独での防災計画はなかなか作って完結するものではないことは皆さん分かると思いますが、大きい災害になればなるほど国、県との関わりが大きいということです。国の中央防災会議で国の防災計画見直し作業が現在進んでおり、今年の秋頃を目途に地域の防災指針が示され、それを受けて県、市の防災の見直し作業を進めるということですが、市は市で独自に見直しを進めているところです。洪水ハザードマップについては平成21年度に6河川、平成22年度に4河川を対象に、住民に直接影響があるという河川の洪水ハザードマップは作成済です。土砂災害のハザードマップというのもあり20年度で調査が終了し20区分について作成済とのこと。津波のハザードマップについては、緊急の課題という認識は持っております。先程ご紹介がありました平成15年度国の地震調査研究推進本部が、日本海東縁部の地震評価に基づく津波震災予測図というのを作成したそうです。これに川の遡上は入っていないのは、それほど大きな津波を想定していないようです。相当の想定外だった今回の津波規模のもの作るとすると、津波が実際に起きた場合の綿密な調査解析が行われていないため、早急にしないといけないのですが、市レベルでは難しく、国県にこの調査解析を現在早急にやるようにお願いしているとのこと。本間委員からありました、そういうものが出来上がって、市民の人が見て大体理解する、見やすい、分かりやすいものがないと仕方がないということで担当課に話しました。同じような認識を持っており、今の防災計画をご覧の方は分かると思いますが、相当厚く読んでもよく分からない方がほとんどだと思うので、住民の側に立った分かりやすい防災計画、防災マップが是非必要だと思いますし、担当課でも非常に大きいこれからの検討課題だと話しております。この防災計画、津波の計画が終わった時点で早急に検討したいということでした。なお、防災計画、ハザードマップ、津波のハザードマップを作る段階では、地域と念入りに説明会や協議はしていきたいとのこと、ご理解いただければと思います。

○ 佐藤正廣委員 市のハザードマップ等の作り方ということをお伺いいたしましたが、以前2005、6年頃だと思いますが、市民有志の方でコミュニティFM立ち上げの話がありました。最終的に鶴岡市さんにも折衝あったと私は伺っておりますが、今回の災害を受けて、現在石巻や気仙沼等々で被災地のほうでも、コミュニティFMを立ち上げて防災無線としての活用がなされています。山形県内だと、酒田市のハーバーさん、山形市のモンスターさん、ビンゴさんと3つほど稼動しております。これは通常補助金ベースで運営されていて、一応有事の際は、原則、市の危機管理からの放送に全面的に切り替えるという形です。今回停電

になった場合、テレビ、携帯電話の充電が出来なくなり、被災地の方殆んどラジオに情報を頼って、全県、全国放送だときめ細やかな情報伝達がほぼ不可能になります。まして温海や朝日の一部だと難視聴区域もございますので、是非コミュニティFM、2005年～6年に立ち上げた方々は、インターネットのコミュニティFMという形で運営はされています。実は鶴岡出身で、FMの全国組織のかなり中堅幹部を勤められた方もいらっしゃるって、ラジオ等には相当精通している方も、人材として鶴岡市内にいらっしゃいますので、是非防災無線としてのコミュニティFMということも、今後ご検討いただきたいと思います。

○ **茅野進委員** 先日ある座談会で庄内支庁の方の話で、酒田市の場合、津波の非常に詳しいマップが出来ていたようです。市独自でなくて、庄内支庁、県で出ているところがあるようですので、それを参考にさせていただいてはどうかと思います。

○ **今野利克委員** 資料の5ページ4番若い世代の育成ですが、私はおそらくこの場で一番若年層で下のほうだと思います。皆さんは、地域のリーダーの方々ということで、今年度11月に完結したその後に、出来ればこの地域審議会の、JCの前の理事長さんも見えておりますが、JCでいろんな分野で活躍している若い世代の人もいますが、それとはまた別に、この地域審議会のヤング版というか、若年層版の地域審議会的なものを公募なりで募集して、機会を設けるというのも、ひとつ次の世代の橋渡しなり、またいろんな意見が出て集約され、次に繋がるのかなと常々思っております。皆さん、もちろんやりくりしてこの場へ集まっていると思いますが、例えば、行政の絡みもあると思いますが、夜間にそういう世代のこういう場をすとか、どこかの二番煎じになるかも知れませんが、夜間議会、日曜議会とかいうのものがあれば、仕事や家庭のことで足を運べない時間帯だと身動きがなかなか取れない。けれども興味はある。夜間や土曜日、日曜日という会議なり、傍聴の機会があれば、なお裾野が広がっていくのかと感じております。

○ **早坂剛会長** 事務局で提案として受け止めてください。

○ **吉住光正地域活性化推進室長** 今回の地域審議会は、このような形でさせていただきました。市では若い人について同じような問題意識を持っており、一回ここで発表させていただきました「まちづくり塾」で、若い意見を取り入れ、若い人が実際に行動出来るようにと2年前にスタートさせ、少し形が見えて動き始めているところです。それはそれということだと思いますが、市でも若い人の意見の取り込みについて相当関心を持っておるということもございますので、この会議についても来年度以降の参考にさせていただきます。

○ **早坂剛会長** もしなければ、これから分科会に分かれていただき、引き続き専門的に部会ごとに議論していただくことで、全体会を終わらせていただきます。

○ **吉住光正地域活性化推進室長** 運営の仕方、今日は分科会のみで全体会を開きません。次回は、今日の議論のまとめを出しますので、それをもとに分科会から入っていただき、最後に全体会をするということで運営をしたいと思いますのでご協力をお願いします

4. 分科会

<地域コミュニティ分科会>

○ **山田登分科会長** コミュニティ分科会をはじめます。まとめとして1番目はコミュニティ分科会と産業経済分科会の共通の防災意識の高揚と総合的な防災対策の点検・見直し、このテーマには、いろいろご意見、感想、様々な考え方を出示していただきました。付け足すことがあれば、まずこの問題から少し時間を割いていきたいと思えます。これからどういう災害が起きるか、また、歴史的な今までの経緯を通じて、災害の規模の大きさを見直す必要があるのではないか。それから災害発生時の対応について、今は科学的な機器が発達しても、いざ災害が発生すると平常時と違い突然機能しなくなった場合に、変わるものを考えていかなければならないのではないかと。あるいは機器を利用して高度の高い情報収集、情報伝達も出来るのではないか。また、コミュニティの中でも専門的な知識、技能を持っている方をどのように活かし見直していくか。防災に対して強い人間関係を育成していくことが大事なのではないかということが話題になったと思えます。さらに考えを掘り下げていただければと思えます。鶴岡という一つの視点もあるかと思えますが、コミュニティによっては単位町内会、集落、学区単位で考えていかなければならない。鶴岡市全体としてのコミュニティもあるかと思えます。コミュニティの大きさに捉われず柔軟に出していただければと思えます。

○ **五十嵐松治委員** 先日石巻市に足を運び、現状を見て様々に思いました。多くの自衛隊がいた中で、自衛隊の所に仮設住宅が多く併設されていたので、仮設住宅には人がいっぱい入っているかと聞きましたが、入る人が少なくてという返事があり意外に思い、どうしてかと聞いたら、自分達では動くことが出来ないような状況で、生活物資を買うにしても遠くまで行かなければならない。その関係から仕事、学校のこと様々あり、仮設住宅に入ると物資の供給もストップし、自分たち自身の責任で動かなければならないということで入る人が少ないという返事が返ってきました。仮設住宅は大災害の時に必要だと思ひ、一生懸命建てても、その後の生活の利便性とかいろんな事を考え、それに伴う支援を一緒にやっけていかないと生活出来ないということで、みんな敬遠しているという現実を聞いたのです。まさに状況を生で見てきましたが凄まじい。太い鉄骨が折れ曲がり、大きい船が途中で上がってすごいい状況でした。しかし、想定外の災害に出会った時の対応として、今までだと私たちは仮設住宅を作ればすぐ住むことが出来るのでいいと思ひていましたが、もっと深い所にあるのだと理解して帰ってきました。災害に伴う自殺のこともまた大きな問題として考えていかなければならないと思ひました。自殺が非常に多いということで、災害前に色々な問題を抱えている人は、その危険な状況の中で災害に出会い、最後の一押しになってしまったということでした。非常にこの自殺が増えていることで、根底にはやはり支援救助というのを考えていかないと、本当の意味での救いにはならないのかと考えております。

○ **山田登分科会長** 災害に対する市への行き届いた支援のあり方というご提言かと思ひます。

○ **茅野進委員** ひとつはボランティア活動について、行政との連携がどうあるべきか、市のボランティアセンターと行政、当該地区のボランティアセンターとの関係はどうあればい

いかという提案があったと思います。ボランティアセンター長との話で、災害地のボランティアセンターよりも行政との整備。窓口がないので非常に出発するのに手間取った。実際の活動になると窓口が一本化、行政とボランティアセンターと一致しないと出動や出発も遅くなるだろうという話でした。早急に行かなければならない場合は、行政の方からボランティアセンターとか民間のボランティアに連絡を頂くことが必要でないだろうか。行政とボランティアセンター、民間のボランティアセンターとの連携図が大事ではないかと提案として申し上げたいと思います。2番目は非常時のリーダーのあり方です。加茂、由良地区では3月11日に地震で高台のほうに皆逃げたそうですが、日頃の訓練はあるが、リーダーと避難訓練が行き届いている所から始まったのではないのかという話でした。リーダーをどう育てていくかが大事なことではないかと思います。その中で、学区のコミセン防災センターは何だと聞かれ困りました。震度4の場合は職員が集まるが、震度5か6の場合はその時考えればいいのだという話を聞きました。防災センターの職員は分かるのですが、一般の人は全然分かりません。防災センターとして、どうあればいいのかを知っておかなければ対応が難しいのではないのかと考えさせられました。防災センターで連携がないと進みません。自主防災はあるけども、横、組織の連携を大事にして、早急に対応が出来ることが学区の中の課題だろう。そういう先端としての防災センターの組織がどうあればいいか、大事にしていかなければならないと思います。

○ 齋藤春子委員 一番大事なことは、自分の命が助かる根本は周りとはどれだけ交わっているか、地域で皆がどこに声をかけこちらにも一人だという、連携が出来ているかということです。マップ作りや防災訓練もいいが、ひどい災害を目の当たりにした時に、町内会、コミセン単位、地域の皆を集め、あの津波を見てどう思うか、何が大事か、何が足りないかという座談会があれば何より効果がある。今からでも遅くないと思います。地域の連携、コミュニティが、皆さんがどれだけ地域を考え、助け合いが出来るのか、皆を大事にしていることが一番大事な柱であると思います。三瀬で福祉について盛んに行った時、隣組の集会のように割り当てても、なかなか集まってくれない中で、災害が起きたら、自分は逃げればいい周りはどうでもいいとはならないか。鶴岡で一生懸命している福祉協力員を、希望者ではなく強制的に組織を作りながら、地域の連携をまず考えていく。私は災害に最も強いのは人間のつながりだと思っています。大事にしながら何をしたらいいのか。資料にコミュニティのモデル地区とありますが、これも地域の連携をどう繋げていくか、まず災害がいい教訓と思うので、是非地域ごと、由良の人達がみな声を掛け、見事に山まで上がったと聞きました。それが日頃の繋がりかだと思いますので、どういう手立てがいいのか、地域の人を巻き込んだ話し合いの場を設けていただければ、ありがたいと思います。

○ 山田登分科会長 非常災害時のリーダーをどのように育成するのが大事なのではないかと茅野委員からお話がありました。また、齋藤委員からも、地域の連携、人と人との繋がりを大事にしていかなければならないというお話がございました。私の町内でも防災については、情報伝達は今の段階では各隣組長さんが連絡の責任に当たっていますが、話し合いをすると、町内会長さんは毎年変わり機械的に決められている。防災の時は役立たないのでないかとなります。ではどういう人を育て選んでいくかということで、草取りや町内会の活動に必ず参加してくれる方、また、隣組の中で信頼していただけるような人を防災の

非常災害時の連絡員にこれからは選んでいければ、町内活動を盛り上げ、隣組に対して目配りができ、非常災害時には、声を掛けるような活動的な人を選定し、防災時のリーダーにしていく。回覧板、文書配布、募金活動をする隣組長さんは毎年変わってもいいが、防災については固定した人をきちんと決めていく必要があるのではないかという声が盛り上がり、そのような人を探していきましようという動きになっています。町内の役員会中でも共通理解をしておるところです。コミュニティは子どもの時からの活動に対する理解を含め、育成を図っていくと言うことが大事なのではないかなと思います。

○ 後藤輝夫委員 行政、地域コミュニティと住民一人ひとりの連携、意識の向上あるいは行動にどう結びつけるかということで、県の消防学校についての設置の目的とかは法令に基づいて消防職員や消防団員の育成であると思いますが、私は今まさに非常時、災害時の地域のリーダーの育成のために、この学校を教育機関として活用出来ないか。充実させて市民がそのリーダーとなって行動できる人達が次々と研修の機会を与えられるようなことは出来ないのかということ考えています。町内会、住民会、隣組、これは行政の部分も担い、配布物、連絡、しかも輪番で軒並み回るだけあって、義務で広報などの配布が出来るということで動いているだけです。地域で農業や家事をしている若い人達は少なく、日中はかつてのような社会ではありません。高齢者の一人暮らし、寝たきりの人達、こういう人達に伝達をするためには、隣組という行政的な小さい単位ではなく、私はのきなみ班と付けましたが、のきなみの心の通い合う人達同士で、あの家のおばあさん、この家のおじいさんが一人であるからというような三軒、五軒ぐらいで動ける防災の行動班をつくるべきではないか。そのためには地域の中に、防災の時に伝達も出来る行動力のある人、若い人や消防団の方は勤めて日中はいません。高齢者でまだ動ける人達が研修行っても大変かもしれません。集落に、去年から親を見守るために帰ってきた方がいます。行動力があり、老人クラブにも率先して入り、住民会の役員もしています。地域のために何とか貢献したいという気持ちがあり、いろんな事を引き受けてくれます。こういう方達を、地域が推薦して消防学校などで専門的な研修や学習を積んでもらい、そうした人達が、夜でもそれこそ隣組を活用しようと、のきなみ班の数軒だけでもいいから自主的な伝達の研修をさせていただくことによって、小さな核が出来て、またその中の3軒5軒が連携していくようなことを、あえて行政がリードしながら、消防の力を我々一般市民にも伝えてもらい、それを地域の人たちに、活かされる組織内、活動の仕方を変えていく必要があるのではないかと思っているところです。

○ 竹内峰子委員 コミュニティのモデルづくり事業ということで、3つの地域のデータが載っていますが、三瀬で15、16年だったので、今の地震の時から8年経過しています。その時に私は委員長をさせていただいたので、ある程度把握していますが、まず子供たちと一緒に三瀬の町中を歩いて防災マップを作りました。一昨年から民生委員と地域が一緒になり防災マップを作りました。防災マップは要援護者の支援にまわるというマップ作りに入ってようやく完成という時に今回の地震がありました。いかに子どもも少なくなり、日中一人で住んでいるお年寄りの家庭が本当に増えたという実態。わずか8年間でこれだけ地域が変わった。防災の指導員の資格というのをあの当時市でやっており受講しました。私その上を求めて講師の資格を持っています。市で毎年少しずつ上の段階ということで、実際に地域の中から推薦してもらい研修を受けた経緯ですが、今になってとても良かったと思います。

日々の中で突然起きた時に、何が出来るかと思いましたが、火事、怪我した時にそういう対応出来る。一人でも増やしていくというのが、これからの課題です。本当に日中お年寄りが多いなかで、どうやったら助けられるかというのが、隣組単位で話し合った時に、隣組単位は難しい。日中、若者がいない中で、いつ起きるか分からない災害に対して、この前、三瀬の福祉のまちづくり協議会のほうでも評議員がすべて隣組の組長ですが、危機管理課から講演をしてもらいました。それから石巻の、今回の地震で身内の方を鶴岡で火葬、お葬式をされた有坂さんという方の話を、民生委員10人位でしたが声がかかり、皆が泣きながら実態を聞きました。民生委員児童委員の全体研修会でも有坂さんから来ていただき、町内会長さん達も講演を聞きました。民生委員、一住民として何をなすべきかという話をしてくれました。日頃のネットワークの大事さということを深く理解して、これから民生委員もやっていかなければならないことを学びました。先程から由良の話が出ています。由良で夜中の地震の後に、津波が来ないのに来たと言われて全員が避難しました。住民の中で最終的には避難して良かった、あれが訓練で良かったという言葉でした。ただの訓練であれば、だらだらとなっていたのでしょうが、津波が来るという警戒心。夜中まで山にいた人、水沢のコンビニまで行った人、由良坂に行った人、その中で今回の地震の教訓となっていないのが、益美荘坂が車で渋滞した事です。あの地震でも、車に乗ったことで最終的に助からなかった命があったにも関わらず、やはり車で逃げて益美荘坂に赤いランプがずっと繋がったというのは、まだまだ警戒意識が薄かったという反省点。それから地域の中で民生委員さんが一日中点滴をしている方のことを知らなくて、三輪車に乗せて搬送したとか、いろいろ具体的な話があり、誤報だったのかと文句を言った人もいたけども、最終的にはいい経験になった、本番しながらだったという話を聞き、三瀬の場合はどうだったかと考えていた時に、8年間でこれだけ変わるのであれば、想定外のものをどうしたらいいか、皆さんで、10年、20年、30年後を考えた時に、ぜんぜん違う地域になっているのかということで、しない訳にはいかない。そのようなことを考えながら、高齢者をいたわる形での防災的なものの考えを一つ起こしていかないとだめなのかと思いました。

○ 山田登分科会長 その他防災に関わることはございませんか。

○ 三浦地域活性化推進室係長 竹内委員からお話ありましたので、協議用の参考資料をご紹介します。地域のコミセン活動の役員としての若い人の参加状況が分かる資料があればということで、市民生活課で、平成15年、16年に三地区をモデルとして選らび調査をし、その中で、町内会の役員になりますか、参加しますかというところを抜粋させていただきました。今の話で若い世代や地域のリーダーという話も出ていますので、少し参考になればということで出させていただきました。参考資料の2は、コミセン活動の中に生涯学習推進員ありますので、こちらも若い世代の参加や役員になっているかということで出させていただきました。平成23年の、各学校の先生方を引いた65人が生涯学習推進員でいろいろ活動されています。若い世代として30代の方が4名、40代の方が14名ですが参加をしています。これを参考にお話いただければと思います。

○ 齋藤春子委員 防災訓練は今年も実施し、中身は変わらないのですか。

○ 三浦地域活性化推進室係長 訓練の内容までは聞いておりませんでした。

○ 齋藤春子委員 危機管理課では分かるかと。日赤のほうで防災訓練に参加しますので、県と連絡とってみます。

○ 山田登分科会長 防災訓練については、昨年度と同じような取り組みでやっていると思います。第2学区は大震災を想定した形で春の防災訓練やっておりますし、また、たぶん大震災を想定した形で秋の防災訓練を第2学区としてまとまってやる予定です。あと、町内ごとに防災訓練をやっておりますが、町内の小さい単位で初期消火の訓練、心臓マッサージ、簡単な負傷者の手当での仕方を交えていたと思います。また、非常時の持ち出しで、どういう携行品を準備していますかということで、桜新町の場合は、各家庭から持ってきてもらい、私の家では、こういうものを準備していますと見せていただきながら、参考にするという場面もございました。

○ 齋藤春子委員 去年はモデル地区の大泉地区であり、今年は湯田川ということで、10月9日に決定したと危機管理課からお聞きしました。災害を受けて中身がどう変わったのか。鶴岡で地震の場合、市街地が地震で三瀬は地震でないというのもあまりない。その場合に消防本部、役所ではどう動くかということをしていません。毎年、山形市の防災訓練をしています。どこの町内でも毎年防災訓練をしています、それを一斉にして、消防本部がどう動くとかをしていないものですから、一回考えないとだめなのではないかと思っています。私のほうは隣組はここからこうしようとか、その流れが全体みんなで行き届くというのでも考えてみたらということで、危機管理課が防災訓練とお聞きしたものですから、今年あたり少しやり方を変えてないかなという期待があります。モデルだからやるのではなく皆でやる。例えば、旧市内だけやって郊外地は見に来るとか、海岸地の避難訓練をやって旧市内がサポートしながら、どんな様子か見に行くとか、もう少し規模の大きい訓練を考えていかないと、有事につながらないのかと思っています。

○ 山田登分科会長 学区、町内会単位でかなり大規模な訓練もあったと思います。たまたま朝散歩に行ったら、何か陰い雰囲気、なんだと聞いたら防災訓練ですということがありました。ある程度大規模な訓練がある場合は、地域住民にお知らせをする、どこでやっているというPRの徹底が必要なのかと思っています。町内会、コミセン組織があるわけですが、コミセンは防災センターという名称で防災のことについては一手に関わっている。町内会がそれに対して全面的に協力をするとなっておるわけですが、その辺についても課題が沢山あるのではないかと思います。

○ 茅野進委員 自主防災の訓練を防災センターでしていますが、それは素晴らしいと思います。ただ、地域福祉の立場からすると、先程の見守りと関係ありますが、要援護者、体が弱い人をどう見守っていくのか、どう訓練に引き込んでいくかということが、コミセンでは出来ない、町内会活動として重要視していかないと忘れられてしまう。その点で、福祉防災マップを作っている、見ながら実際活動を具体的にやって欲しいということを町内会にも言っていますが、そこまでいっていないのが事実です。やっているところがあれば素

晴らしいと思います。要援護者、災害に弱い方、障害者を含めた方々に対する、見守り支援だけでなく、防災に対する考え方も含めた。私が一番心配しているのは、福祉マップは福祉、社協とかでやるべきで、防災は町内会ですという意識が非常に浸透していることです。今は、行政、地域、地域福祉というのは住民の幸せのため、連携協働しましょう。それに対する、町内会、民生委員も社協も一緒にやりましょうという発想でいかないと、非常に難しいのではないのか。言葉はいいのですが、機能分担と言う形でいきますので、連携が非常に下に行けば行くほど取れていない。町内会長さんは忙しいから、そこまでしなければならないのかという声があるのですが、全国一人の災害者も見逃さない運動を全国でやっても、その運動、意識がみんなに浸透しているのか。それを含めて連携、我々上部、各関係団体のリーダーが集まって、情報交換連携していくことが大事でないかということを感じて要望したいのですが、上部のほうで座談会をすとか、検証をすとか、そういう機会です捉えて欲しい。審議会の席ですが、各組織団体がいますが、別の機会で作って欲しいと思います。

○ 齋藤春子委員 福祉にも携わりコミセンの経験もしていますが、福祉は福祉協議会を立ち上げないと地域の福祉が浸透しないという形で、三瀬も別です。自分は担当でないが、コミュニティの中に福祉、防災があつて当然。市内の町内会が、自分のほうではない、あなたのほうだということで、それで地域なのかという感じがします。そこを見直して一般化し、例えば、担当とか、専門にやるのは別であっても、同じ組織の中で、福祉は、コミセンだから別というやり方でいいのか。コミュニティのリーダーであつて福祉のリーダーではない。そうではないのです。何本立てかになっている感じがします。町内会は忙しいからだめ。あまりよこすなつて言われるだろうけれども、それでいいのかなという感じがします。

○ 山田登分科会長 町内会の中に、社会福祉、防犯、交通安全と、それぞれの組織が包まれている感じがします。まとまって地域が行動できるよう横の連携、団体ごと今何をやろうとしているのか、お互いに理解していなければならないのではではないか。そういう理解を図るために会議を増やすわけではないけれども、第2学区でも三団体の会議があり、それぞれの団体が今何を課題にして、何をやろうとしているのかという理解を図っています。ただ、実際の場面に行くと様々なことが出てきます。

○ 齋藤春子委員 なんでも入ってくるからコミュニティではないか。コミュニティは一体何かと考えると、地域だから交通安全、防災がみな入り、それをまとめていくという形が本当なのかと思います。自分のほうは、自分のほうは、という形でいいのかと感じています。

○ 茅野進委員 町内会長さんは本当忙しい。行政の縦割り。民生委員が高齢化による認知症の対応などの調査は分かります。私の学区も前は一緒でしたが、忙しいので別れて三団体でしています。その辺は調整され、大分良くなってきました。コミセンのあり方というのが、住民が自由に入られるような組織で、町内会長、コミセン、社協、その他民生委員という団体の連携を密にしていけば。上層部のほうでやっていかなければならない。頭では忙しい忙しい、させられたというのではなく、今、こういう実態なのだと皆で事実をつかんだ上で話をしないとやはりうまくないのでないか。

○ **山田登分科会長** 第2学区の場合、以前は、町内会、社会福祉、コミセンと三団体でしたが、最近から四団体とし民生委員の代表が入っています。そこでいろいろ課題を出し合って調整をし共通理解を図るといふ会をしています。ただ、代表者だけなので、下まで集まって話し合いをしたいという要望があり、そういう機会も作っていかねばならないと思います。

○ **齋藤春子委員** 町内会と地域のコミュニティと全然別で、鶴岡地域だけで21学区となっています。町内会と自治振興会とは別枠で一緒にならないのと言うと、昔からそうになっているのだからとよく言われてきましたが、それが一つにまとまらない理由はやっぱり忙しいのですか。それからリーダーの世代交代をしているので、養成をしていかねばならないというのは出ています。そこだけは役所がリードを取っていただきたい。私達は5年ぐらい続きましたが、コミュニティとは何かを研修させられました。最近コミュニティは定着したのではなくて、世代が交代しているのだから、必要があるというのは皆さん認めているようで、そこを前向きで考えてもらわないと、防災も、足が地に着いた活動というのは、リーダーの養成も大事な役目ではないかと思ひます。

○ **茅野進委員** 社協の立場は扶助から自己選択です。地域福祉が重点でまちづくりに関わっている。町内会と福祉協力員の社協とは、皆一体化しよう和我々の考えです。福祉計画、福祉活動計画を皆さん作りましたが、その中で19ページに、これからのまちづくりは、チームリーダーは町内会長、民生児童委員となっている。町内会長と民生委員を中心にして、我々はサポートしながら協力員もする。隣組単位での見守り支援をしていこうというのは、地域福祉ですから、今は町内会長と民生委員と全然違うという発想ではなく、協働していく。住民の幸せのために一致されるという発想で進めていきたいと考えております。

○ **竹内峰子委員** 忙しいのではなく、個人情報保護法の中で、民生委員の中には守秘義務というものがあるものがあります。三瀬の場合は要援護者マップを作るのではなくて、町内会長、消防、福祉のまちづくりと言いますが、すべての合同のもとで作りました。守秘義務の中でなく、紙で、援護が必要ですかと全部一軒一軒から取り、これに載せます、毎年変わるので公開しますという条件でしています。全てあからさまにして、民生委員と町内会長さん、消防、福祉協議会の会長さん、私たちは、すべて同じテーブルつきながらしました。高齢者率が高くなり、いつ何が起きるか分からない中で、民生委員だけの資料ではなく、私達がない時でも、隣組長さん、会長さんが対応できるようなものを目指して立ち上げました。学区の方にどのように声かけが出来るか、会うたびに言われていますので、今日の話、それぞれの単位の会長さんと是非話し合っていきたいと思ひます。民生委員活動は一人では出来ない。地域の協力あつてのものだという話で話し合っていきたいと思ひています。

○ **山田登分科会長** 町内会長と民生委員の情報交換、守秘義務と情報の共有化がどうあればいいのか。町内会長も情報を把握しなければならぬし、民生委員さんも地域の困っている方々の状況を把握しなければならぬ。秘密を守るといふことは、法の精神の意味もあり、お互いに連携し、なんでも知ったことを言うのではなく、人権を守りながらその人の幸せをお互いに考えていくという方策を講じていくために、つぶさに状況を把握しておく必要があるため、情報の共有化を図りましょうといふことです。第2学区では実際そういうテーマの

もとに話し合ったこともありました。情報の共有化が必要という認識にたっていると思いますが、情報をどう活用していくか、活用の場面で誤解を招いたり、様々扱い上問題が出てきたりということがあって、丁寧に慎重に取り扱っていかなければならないのではないかと。

○ **竹内峰子委員** 過去に民生委員から聞いたというのが出るそうです。そこでトラブルや信用がなくなる。そこがなかなか難しいと思います。鶴岡病院が来年度からの建設に向け今スタートしていますが、この前、今病院に入院している方々、老人と同じで、ずっと施設に入れておくのではなく、これからは地域に戻すという話が出ました。そうなった時に、地域で見えていかなければならない。地域の中で高齢者は増える。今まで知らなかった人もいる。この前、由良の国道で由良に来ていた方の事故があり、駐在員も情報がなく最初はどなたか分かりませんでした。例えば、空き家だった所に人が来てても住民が知らなければ、何かあっても対応が出来ないといったことを、今後も課題として凄く大きなものが、投げかけられているのではないかと、守らなければならない大きなものの一つに入ってきたのだと聞いてきました。高齢者もずっと病院、施設ではなくて、今度地域の中に戻しますよというのがこれからの医療だということを聞いた時は、一緒に対応していくようなシステムでないと、地域の中でのことが解決できないと思います。今まで見たことのない方が、住民として地域の中に入りますので、我々も受け入れていかなければならない時代がまじかに来ているという意味では、大事なネットワークを作っていかなければならないと私は思いました。

○ **後藤輝夫委員** 町内会長、社会福祉協議会の会長、民生委員、それぞれ皆さんはその専門分野から切れ込み問題点を指摘しているのは分かりますが、それぞれの立場のことを言っても何にも束にならない。コミュニティの問題、自治会、町内会、これまで何十年もやってきて、その中から手直しをした話をして、そこに特有の状況や条件でなっているわけです。私は湯田川地区ですから集落2つです。新しい自治振興会を作るためには、住民会が2つしかありませんから、その自治振興会の基盤は2つの集落が基盤であり、まずは確認し合い地域の一団体が、これを専門的に分担するような形でやってきたわけですが、一旦組織が出来るとその時から運営され、そう改善されない。今日もこれまで委員会でも、別の会議でも繰り返し言っていることを傾聴していますが先進的、実践的なことをしている人達が、町内会の会長さん同士の会を通じても社会福祉協議会とのブリッジが出来ない。民生児童委員との直接的な交流が出来ないのが現実でないかと思えます。私は地域の活性化のためには、是非とも遊学の精神を持ってもらいたい。自分のほうだけでなく、単なる交流、連携でない、よその地域がどういうことをやっているのか、よその町内会ではこういう取り組みをしている組織なのだと、学び合うことが大事だと思います。特にこれから小学校の小規模校の複式の解消ということで統廃合があります。小学校区といっても学校がなくなった地域がそのまま残って、2つの集落や5つの地区が集まった所では知恵も出てこない。町内会組織から学ぶものもあるでしょうし、よその先進的な社会福祉協議会からも学ぶところもあると思いますから、私は小学校区が今のままでなく、新しい校区になっても、相互に遊学し合って学び合い、情報を得て方法を学ぶということをやっていかなければ、地域の改革にはならないと思うのです。

○ **山田登分科会長** 組織をつくって今までやってきましたが、他の組織からも学ぶ必要が

あるのではないかという考え方は、大事にしていかなければならないと思います。

○ **高山利幸委員** P T A連合の副会長ですが、まだ、学校のことをやっているという段階で、地域の防災、お年寄りのこととか、皆さん話を聞いて、初めてそういう実態を知ったところです。若い世代について発言させていただければと思います。皆さんの町で若い世代の行事参加率とかはどうでしょうか。青柳町ですが、自分達くらいの親の参加率が非常にいいです。何をやるにしても、声をちょっとかけると皆集まり、非常に盛り上がり、反省会も公民館があふれるくらいの集まる状況です。ほかの町に聞くと、役員になれば行かなければならない、当番でなくてはいけないような状況のようです。青柳町のような新興地帯でというのを聞きます。青柳町で青年会という組織があり、そこからいろいろ繋がり、何かあったら、そこを通して声をかけていただくような感じです。学校のP T A会長をやっていて、何かあったら青年会が助けてくれるという安心感があります。もし、今後、若い世代とかが、こういう地域の活動に入っていくきっかけがなかなか出来ない町内会とかに対して、今後、青柳町は青年会があるということを、参考例として知っておいていただければと思います。

○ **山田登分科会長** 子どもとお父さんお母さんが一体になって活動することは、将来の子どもを育てるのに大変いい教育効果をもたらす。子どもの時に良い活動を通じ素晴らしい感動を得る生活体験を持つと、また故郷に戻ってくる。故郷愛、郷土愛が育つのだということ、盛んにお父さんやお母さん方が交流会の時に言っています。高校を卒業し大学に進学して、どこかの会社に就職をすると故郷を忘れがちですが、子供の時にしっかりした体験を積んだ人間は、また故郷を思い出して戻ってくるという。親としても育てたという満足感が得られる。ただ、何人かは世界的に活躍する子どもも出てくるとは思います。もう一度自分の側に来て一緒に暮らせるような子どもに育て欲しいという願望もあるのではないかと。町内活動を通して、親たちの意識が強くなってきているということは素晴らしいと眺めておりますし、P T A活動として、うちの町内でも、町内会や先進的ないろんな所から学んで取り入れた活動をしていければと思います。

○ **五十嵐寅吉委員** 合併した6地域の代表者会議というのが年1回、この間27日にありました。その時も話したのですが、鶴岡には町内連合会と私達の自治振興会連絡協議会と2つ組織があります。この間の地震で義援金を、町内会連合会は1世帯1000円集め、自治振興会は500円でした。理由があって違うのですが、ほかの地域も1000円と500円でした。斎藤さん言われるとおり、なぜ一本にならないかという、町内会は町内会費が月々500円くらいです。郊外地は、防犯協会費、交通安全会費とか入れると大体2000円から3000円で、自治振興会費も入れると3000円以上です。パターンが一緒になるのは大変いいと思っていますが、そうではないのです。地域の伝統、地域性があるということなのです。合併も4、5年となり、ある程度、各地域もみんな全体として一本化しなければならないのではと。それがいいとか悪いとかの問題ではなくて、ただ行政、住民サイドとして、補助金も体系も違うものだから、それは尊重していかなければならない。防災の被害の大きさの関係をなくして、隣で火災や地震の時、年度変わりになっていつも、住民会長さんは集落の最高責任者だから、いつでも運ぶとか、隣の人に絶対教えてくださいと。それが一番の重要なことです。

○ 稲泉眞彦委員 今回の大震災をチャンスと捉え、市も積極的に今までの感覚でないものを打ち出してもらいたいと思います。日本人はボランティアや寄付行為をあまりしない民族だと多くの人が思っていたが、今回の地震では決してそうではなかった。鶴岡の人が、体育館に衣類、毛布などを持ってくる人が、年寄りもいるけれども若い人達、子どもを連れた人達がいっぱいいました。それから寄付した話でも、若者たちから年寄りまで含めて、みんな本気で取り組んだのではないか。だから、若者や年寄りがどうのとかというのではなく、むしろ若い人達の感覚が鋭く、若者は自分自身の生活が年配の人達よりはるかに厳しい状況にあるのだということを考えるべきではないかと思いました。そういう意味で、今、震災で本当に皆が注目している時だから、出来るか出来ないかという発想ではなく、市は今までにない画期的な思い切った提案をしてみる事が大切で、しかもその計画が見えるものでなければだめだと思います。今までの計画は、ハザードマップがあり、水害ハザードマップも見ました。これに関して言えば、私の家も親から代々伝えられていることがあります。昭和10年かその直前に鶴岡で水害があり、その時の話で、私の家の1階の天井のちょっと下、一尺位のところまで水が浸かり、ここまでは水がくるよ。また、水害になったら取るもの取らず、とにかく高町に逃げろとも教わりました。そうやって先人からずっと伝えられています。今、地震は津波は来にくいと言いましたが、水害に関して言えば、この間の新潟と同じように、あの場所がこちらに移っていれば、ここも分りません。大きい赤川水系だけでも3つありますが、あのダムはほとんど満水になれば、みな放水するので降ったまま流れ、水がそのまま河川に流れてきます。内川のなどの水位を見ていると非常に不安にもなります。そういう意味では水害の確率のほうがずっと高いのではないか。それから、見えないということを通し上げたが、私のところは、何かあったら鶴岡北高に逃げろとなっています。まず、今地震を考えると逃げるのはいいのですが、逃げた先に毛布があるのか、ビスケット、水があるのか。水は多分上のタンクの水を節約すれば飲み水は確保できるでしょうが、逃げていいのか、逃げないほうがいいのか、自分の家の2階にいたほうがいいのかと、本当に逃げるという意味では、まだ、我々には見えていません。年寄りを背負ってでも逃げるのかどうか、どこに行くか分かるのか、分かるようにしてもらいたい。学校の教員をしていて、鶴岡中央高校建てる時に、阪神淡路大震災の直後でしたので、相当深く関わりました。阪神淡路大震災直後なので、県はこの学校は地震で絶対倒れない学校を造ると。向こうの学校が丈夫な学校で、全部避難所になり、高校生が一般の人達を一生懸命助けて、1ヶ月も2ヶ月も炊き出し、年寄りの通院その他を手伝っていたことが、私も友達の校長から聞いております。そういうことを構想して基礎工事に相当かけています。地盤は周りが沈んでも建物そのものは沈まないという杭を打ってあります。それと同時に県の防災拠点にしたかったのですが、予算その他で。例えば、毛布、食料の備蓄する部屋を考えていたわけです。今、コミセンその他にそういう機能がありますが、今、市民が大量に被災した場合に、3日とか1週間、他からの助けが来る前に、市民が安全にしかもできるだけ不満が少なくということを持った時、例えば鶴岡にいた時も避難場所に指定されても、何をしてくれとはなく、逃げてくるぞとしか言われていない。来た場合はどうするのかということまで言われていない。来れば毛布はどうやって運び、食料はこうする、そこまで含めた見える計画にして指示をしていただかないと、計画だけでは実際は機能しないということになると思います。石巻の話がありました。私も友人が石巻におりますので、最近行って見ました。未だに広大な敷地が、市の中心街の店が全く開かれていないような状態ですから一体いつになったらと思うと、本当に可哀相な情けないよ

うな気持ちで帰りましたが、我々も、もうちょっと心して計画立てておく必要があるのではないかということ強く感じました。

○ **山田登分科会長** 非常に高度な提言があったかと思います。思い切った提言、しかも見える形で提言の中に盛り込まれ、どういう行動をとればいいのかという具体化した提言でありたい。また、五十嵐委員から大変大きい問題ですが、鶴岡市が合併してから、それぞれ自治組織活動を行っておりますが、合併して悪かったとにならないよう、これからも活発に地域の幸せになるような自治活動をしていくには、何から一緒に出来るか、共通理解を図ることで年何回か代表者の会議を開いております。ただ話し合ってみると、行政からの補助金、地域での活動、予算の組み方の違いの大きさを理解し始め、それを共通理解し一緒にできるのは何かということを探っている状態です。やがては、一緒になっていくのかと思いますが、話し合いの中身を披露していただいたと思いますので、これからも活動については、この中で、協力を頂いて活発に地域のためになるような、自主活動になるようにがんばっていきたいと考えております。ひとつよろしく願い申し上げたいと思います。ということで話し合いの時間のたったようですので、まとめは事務局でしてください。

○ **三浦地域活性化推進室係長** 1番が全体的な防災の話、2番は地域コミュニティの役割とそこに地域防災ということで、今日は少し防災に時間を頂いてご議論いただきました。次回も分科会でいろいろご議論いただきますが、3番の高齢者の要支援者、4番の若い世代の育成支援を、最初に議論いただきながら、コミュニティというのは大きく、いろんな事が含まれていますので、組織の話でも、今回の震災のきっかけとなって見直ししていかなければならないし、これをやったらいいのではないか、若い世代で何か出来ないか、組織づくりが出来ないかというのものもあるかもしれませんので、その部分も入れて次回のご議論深めていただければと思っております。引き続きとなりますが、ご意見ご提言を頂戴したいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○ **山田登分科会長** それでは、今回はこの分科会から始めて全体会になるということで、お願い申し上げます。

<産業経済分科会>

○ **今野毅分科会長** 皆さんこんにちは。先ほどは前段の部分でご苦勞様でした。地域審議会については斎藤委員からお話あったとおり、流れ等については認識されたと思います。そこで今日を含め2回ほど協議して11月にはある一定のまとめとなりますので、当産業経済分科会においても、資料を見た限りにおいては、いろいろな地域を見渡した意見等については整理されたのではないかなと思います。そこで今日の貴重な時間ではありますが、項目の鶴岡推進力の核としていくためのアイディア、実現するための組み立て方について議論していただきたいということ、皆様には6ページから、先ほど一番大事な市民としての心とマナーの部分などの話が出ましたが、ご意見等、今日この場でいただければと思っております。そこで6ページからになりますけれども、5の地域ネットワークによる情報の発信・展開の仕組みについてであります、まずこの部分について総括を事務局から説明してもらえますか。

○吉住光正地域活性化推進室長（まとめの説明）

○ **今野毅分科会長** 今事務局から過去の議論の中で、皆さんから多岐に渡り、なおかつ非常に高尚なご意見を頂いた部分をまとめたものが、リストアップされています。何か一つ二つ提言するというところで、出していきたいということだったかと思えます。それらも含めてなんですが、佐藤委員からFMラジオ局の話もありました。早坂会長から城下町らしさの部分のアピールと鶴岡城址に関わるような御角櫓という話をありましたが、もしする場合はどのような形で。ただ話をして活字にしても、何も生み出しませんので、具体的に動かしていくにはどうしたらいいかを皆さんからご意見をいただければと思えます。

○ **三浦惇委員** 鶴岡市は文化、観光、農業都市と複合市です。特に観光の部分で市民自らが観光都市、受け入れ側として気構えがなっているのかどうか。よく人情的には純粹と言われますがどうなのか。もう一度市民の原点に立って鶴岡市全体の考えで進めて。団体客やグループ客などは増え、山王町や役所の前の通りも大勢の方を見かけたりするが、割合と親切だという話を聞きます。そういう一面もあるが、なかなか整わない部分もあります。その辺もう一度、観光都市として受け入れるような方針を考えていかなければならない。観光ガイド30何人も登録されて一生懸命やっていると思う。案外市民の人は分からない。どこに照会すればいいか分からない。観光物産課に聞けば分かりますが、駅前にも観光案内所あります。そこでガイドを紹介する手立てはあると思えますが、ある程度市民からも、あるいは他から来た方も分かるような対応の仕方が求められてもいいのではないかと思います。それから二番目には市民参加の観光、市民から県内外へ発信する手立てはないのかどうか。例えば年賀状や葉書で鶴岡市のらしさを発信する。企業からの発信。それから観光大使はそれぞれの立場で頑張っていただいておりますが、県でもやっている中央で活躍されている大使との関係もあるので幅広くやるとか、東京事務所、県人会かなり掌握して観光物産をしています。5月7、8日に元気な庄内をPRしましたが、ただイベントをやるということだけでなく、その土地で何らかの一步進んだものは出来ないだろうか、この辺を考えることがあるのではないだろうか。とにかく発信を出来るだけ多面的な方法でやるのが、お金がかかり大変で、

ある程度無駄な面も出てくるだろうが、それと同時に受入れ体制もきちっとしないと立派な発信をやっても駄目です。そういう面での受け入れ態勢の整備、これは施設の整備だけでなく、ハードソフト面も含めて考えていく必要があるのではないかと思います。それから三点目は観光というのは裾野が広くてあらゆる産業を網羅していますので、ネットワーク、横の連絡。例えば農業の組織がありますが、例えば観光パンフレットにしても、だだちゃ豆はいい例で、鶴岡最高の特産品と分かりますので、これをもう一步進めてパンフレットにして、全体が理解しながら対応出来る、あるいは受入れが出来るような内容で、どこでも誰でも説明できるような資料やパンフを作っていく必要があるのではないかと、最近つくづく感じるわけでございます。

○ **今野毅分科会長** 三浦さんから、三点ほど具体的なお話を頂きました。せっかくの機会なので皆さんから積極的にご意見を。もてなしという言葉をよく聞くし使いますが、我々本当にあるのか、問われるとどうなのでしょう。観光市民、観光地としての意識がここに醸成されているのかどうかという部分が一番大事だと思います。

○ **早坂剛会長** 会議所の婦人会で、土曜日日曜日にお茶を出すもてなしの催しとか、5月のゴールデンウィークにやっすごい好評でした。というのは、今の観光ガイドではないけれども、場所がどこにあるのか分からないのです。駅前で考えれば東館の1階の所が空いているので、例えば鶴岡の表玄関ということで、観光ガイド、観光案内所。JRを利用してきた人は分かりますが全員は分からない。常に詰めて観光ガイドだとか観光タクシーの手配とか。ああいう所を訪ねてくるのは圧倒的に個人です。不平不満を持っているのは個人であって、団体客はバスで行きガイドもいるから満足して回っているけれども、リュックを背負いながらご夫婦、友達、主婦のグループで歩いている人達にとっては、藤沢周平記念館は、ひとつの鶴岡の呼び込みのきっかけにはなっていますが、来てみると、どうやって行けばいいのか、どういう歴史的なものがあるのか、受け入れるガイド的な人達が足りない。東館の所が空いているのだから、駅からバスに乗って行く人にも、案内所的な所を作って、そこに行けば貸し自転車もある、ガイドさんもいて、要望によってはタクシーの手配もしてくれるような、窓口があればいいのではないかと。

○ **今野毅分科会長** 駅にそういった小さいのがありますが。

○ **三浦惇委員** 観光連盟で3名交互にやっている。

○ **早坂剛会長** ジャスコ側が空いているので、せっかく駅降りて見渡しても何も無い。駅側の案内所に三人いるので、マリカに移すことは出来ないものではないかと。

○ **吉住光正地域活性化推進室長** どうやって利用するのか、いろいろ検討したのです。それで子どもたちが勉強する場所になりましたが、観光情報センターというのも意見も出てますが、相当専門的にこの場所が良いのか検討しないとイケないのです。鶴岡には飛行機、列車、実際マイカーで来る人も相当数いるわけです。

○ **早坂剛会長** マイカーで来た人は駅の案内所は分かりません。例えばあそこにレンタカーの案内とかあれば、実際駅前通にレンタカー屋さんもあるわけだから。

○ **五十嵐吉右衛門委員** 観光協会とか、商店街とか、いっぱいあるでしょう。その辺の連携性です。他県からお客さん来る場合やはりどの程度のサービスをするのか。それなりに対応すべきだと思います。

○ **吉住光正地域活性化推進室長** どの場所に設置するにしても、お客さんの動線を調べなくてはならない。

○ **早坂剛会長** 駅前にあるビジネスホテルがいっぱいありますね。あそこに泊まって駅の方から日吉町を通して歩いてくる人結構多いです。

○ **今野毅分科会長** 先程三浦さんから三つ目でパンフレットの話がありましたが、鶴岡の観光パンフレットいっぱい見ました。あまりにもありすぎて分からない。鶴岡はガイドブックがあまりにもありすぎる。どこに行くと何を聞けるかというのがあるのかもしれませんが、たまたまパンフレットが自分の手になれば、ボランティアガイドさんのことも、私はよく分からないのですが、きっちり整理すべきなのではないだろうか。パンフレットを作ると営業だと思ふ部分が鶴岡の人にはあると言われたことがあるけれども、そもそもの人の気持ち、分かり易さというところを何かしなければ。そのあたりどうですか。

○ **佐藤正廣委員** パンフレットを作るのが目的になっていて作ってお仕舞いです。作って、何人呼ぶのか、売り上げだったらどれくらい目標にするとか。現実問題、映画村の観光客は減っているのです。湯野浜、温海、湯田川とか混んでいるようで実はどんどん減っている。それを何とかするためのパンフレット、儲けようとしてそれがあって作るしかないのです。ちょっと話はズレますが、郷土料理の本「つるおか おうち御膳」私も買いましたが、書店の人に確認したらすごい売れています。行政の役割としては、公正、中立の立場に偏らず、藤沢周平の話、地元産品、観光地といったしっかりしたパンフレットを作って、検証可能な数値目標等立ててやるという形で取り組まないと我田引水です。駅前で作っているのは駅前の話しか載っていないし、飲食店なら飲食店だけの話になっています。

○ **今野毅分科会長** そういうことなのです。それぞれいっぱいあるけども、それをどうすればいいかということなのです。どうすればいいでしょうか。

○ **早坂剛会長** コンベンション協会という庄内一円の行政体があります。そういうところで事業をやらなくて、結果的に予算があるから、パンフレット作ってこれで事業をやりましたということで終わってしまう傾向が圧倒的に多くなっている。それを今やめさせようと思っています。今回私初めて東京や大阪でキックオフをやったりして、そういうことにお金を使っていこうと変えています。もしパンフレットを作るときは共通にして庄内一円とか庄内一本でやっていきたいと思います。北庄内や南庄内とかそんなものもあるし、いつの間にか行政でもってやる。おかしいと思います。

○ **今野毅分科会長** 行政となると各町村があるから、庄内はひとつにはなかなかできません。早坂会長が言っていた、例えば庄内藩というひとつの単位の中で、観光PRや受入れ態勢が必要なことだろう。そういうためのネットワーク、視点が必要だと思います。

○ **荘司正明委員** イメージですし、やれるかやれないのかは分かりませんが、商工会議所、農協、各種団体から出向なりで組織を作り、推進協議会と的な形式的なものでなくて第三セクターとして、例えば「庄内藩」という組織を作り、そこは各団体のネットワークを利用して情報を集め、企画し営業活動、発信するという団体がひとつあってもいいのかと思います。観光というよりも、体験型観光、庄内藩侍体験ツアー、庄内藩三大霊山パワースポットツアー、庄内藩伝統料理作り体験ツアー、考えればいろいろ企画が出てきます。そういう企画を練って、電話、DM、ネットを使って営業活動をしていく。あるいはパブリシティで面白い企画があればどんどんマスコミに取り上げてもらう。外に向けてどんどん発信していくパワー集団のような第三セクターが予算だけ使いきるだけでなく、収益活動をするような組織があるといいと思います。あるいは農産物の宣伝、各団体から集まれば色んなマッチングとか出来るわけですし、そういう組織、若しくは庄内藩という一つの名称で活動する方向は出来ないでしょうか。

○ **本間孝夫委員** 我田引水ではなく、本当に庄内を一つにまとめたいろいろな提案が出来ると感じてきました。資料頂いて、6番の地域の観光・産業・文化の活性化が基本的に出来ていて、地域ネットワークによる情報の発信になってくるのかという気がします。何が基幹になるかと考えると、部分的に色々今具体的なものを出して行かないと、駄目な時期になってくると思うので、出された意見がこの会議のまとめになっていく気がしますが、私は基本的に農業、漁業、林業、観光の4つの柱が作られていかないと、一過性になるという心配があると思います。例えば農業、果物、米、野菜、色々おいしいものが年間通してあります。それから漁業、庄内浜のお魚は最高です。そういうものを除いて、この地域の観光・産業・文化の活性化はありえない。さらにそれを支える若い人達が、その基幹産業に参入してこられるかというものを作り上げていく。これが非常に重要だと思います。例えば山形でガールズ農場が全国的に非常に有名で、入るのも容易でない企業になりつつあります。自分たちで作り、食べて、加工し、そして山形のおいしい農産物を全国に発信していくという若い人達の組織が出来ている、観光にしろ、いろいろ意見が出てその通りだと思うし、それぞれ部分的な提案としては非常に意味があり重要だと思いますが、この5、6のテーマに対して言えば、鶴岡に住んでいて良かったと思える人を、どれだけつくれるかということです。そこを支えるのが若い人だと申しましたが、発展性を考える若い人達の参画がなくては先細りになる。若者より高齢者ニーズに応える商店街づくりを進めたほうがよいというご提案もありました。買物難民の問題も、私も生協で仕事をしてきましたが、事業なので採算が合わなければ止めます。今はテストケースでこれからもう何回まわれば採算が取れるかと判断してやっていますが、高齢者も増えて、喜ばれている。それを市で支援した朝日、温海の産直カーを事業的な側面だけでなく、もう少し行政との関わりで展開出来る場所、車の改造ということを取り上げていかないとという問題は残っておりますが、それも一過性です。やはり基本は農業、漁業、林業にどれだけ若い人達を組み込んでいける、そういう施策がとれるのか、非常に関心持っている人がいます。山大到農援隊という若い人達が農業を体験しながら、酒

田に畑を持ち、野菜の改良や取り組みをしている部隊がある。まだ認知されていませんが、そういう若い何かをやろうする人の芽を摘まないような支援の仕方をするのも、5番6番の課題としては非常に重要なのかということです。一つずつこんなことをやった方がいいと、さっきパンフレットの周知したものを作ると、これは本当に良いと思いますが、一番基にあるものは何なのかという事を考えながら、やはり庄内では農業・漁業・林業・観光、それを一つずつばらばらには考えられないと思いました。

○ **五十嵐吉右衛門委員** 本間さんが言われたような角度で、私なりの考えを申させていただきます。私は農村部、湯田川の藤沢ですが、商店については皆さんから詳しく聞いている立場ですが、鶴岡市の文化構想については、山、海、平野があり、観光は重要視され、毎回審議会で話題になりますが、私は例えば集落一品運動、武家屋敷をもっと活用した方よいと発言させていただきました。集落ごとに既存された行事はいっぱいありますが、その行事には若い人達が忙しいこともあって参加する人が少ないという現状です。集落には立派な行事があるにも関わらず新しいものへ走ろうとする。それは非常にいいかもしれないが、既存の行事についても大事に参画しながら、観光に結びつける行事を考えなければならないと考えておりました。先日湯田川でも若い方々がイベントをやりましたが、若い方々の企画ですが、そればかりでなく周辺の歴史や観光に結び付けた行事を考え、PRしなければならないのではないかと。若い方も精一杯でアドバイスも無く、結果的にそうやってみなされている点についても、各集落で支援体制を考えていかなければならない。各地域の特産物、季節的に変わりますが、例えば湯田川街道、田川・温海川方面、海岸方面へのルートがあります。行事あるいは山、海、また歴史・文化がいっぱいあります。そこを交えた現実的な計画性を持って、連携しながら行事を明確化、PRし県外から誘客をするというシステムが考えられるのではないかと思います。大きな計画を持ちながら、その中にはいろいろな立場の方もいる。そこを年一、二回で連携しながら。出羽三山、羽黒山、朝日などを交えた長期的な計画の下に地域的行事がいっぱいあります。それに対しての支援・アドバイスの考えを持って、地域的な計画性を持ちながら計画していったらいいのではないかと思います。鶴岡市大きな計画もなされておりますし、それに従って考えるべきではないでしょうか。

○ **今野毅分科会長** いろんな地域の折々の、様々なものをまとめるようなお話だったと思います。本間さん、初めてご参加で、せっかくですのでご意見いかがでしょうか。

○ **本間昭志委員** 初めてなので皆様の意見をお聞きしておりました。常々思っているのが、後継者が非常に不足していると資料にも書いてありますが、農業もそうかもしれませんが、漁業者の後継者は本当に少ないです。というのは平均年齢を出しても、山形県の平均年齢は65歳位です。正組合員が最盛期の60年代後半には3000名ほどおりましたが、今では1500名を割るような状況です。それで50歳を超えている人が半数位です。もう10年後になると500名を割るのではないかと、漁業でも心配をしています。これから何をするのにしても、後継者を育成するにはどうしたらいいのか、これは一つの課題だと思います。例を挙げると、私の船に3年前から水産高校を卒業した若い人を乗せましたが、仕事が辛いからと半年でもう辞めています。今年も半分が辞めています。我々の時代と今は違う状況だと思いますが、もう少し、若い人達の指導というものに対して、学校からもひとつ教育など踏

まえて指導していただけたらと捉えております。今回は初めてなので、皆様の意見を参考にしたいと思います。

○ **今野毅分科会長** この場で何度も話したのですが、何を食べてもおいしい。もちろん農産物、魚介類、水産物、山に行ってもおいしい、そういったことから水産資源というのは、地域の重要な観光資源だと思います。十二分にこの地域の中で食されているのか。私先週の土曜とある漁業をやっている方に会いましたが、それが全てではないでしょうが、蟹だって築地に行くそうです。ここの本当のものは食べられないのだと聞きました。

○ **本間昭志委員** 築地に行くのはほんの一部です。

○ **今野毅分科会長** 非常に資源がある。話を積み上げていけば、そういった物も食べられるし、おいしいもの、おいしい酒、おいしい米、色んな人の人情も含めてトータル的な観光地域、あるべき姿だと話しになるわけですが、そういった意味では心配無いわけです。

○ **本間昭志委員** 担い手もそうですが、今の若い人方は魚を食べてくれないのです。だから毎年由良で直売会をやっています。一匹ままの魚を買っていくのは、だいたい50歳を超えた方々で、若い方々はほとんど手を出してくれない。但し加工された物、から揚げにするとか手を加えてすぐ食べられるものは即座に買っていくのです。今の若い人達は出刃包丁を持っていない家庭多いと思います。

○ **今野毅分科会長** 素晴らしいものがある。どうやって将来性を持ってそこに活かすか。幾度となくこの場で話され、どう結びつけるかだと思います。

○ **三浦惇委員** 観光客は非常に多様化され、ニーズに沿った対応の仕方が求められています。修学旅行生をこちらのほうに来年から受け入れをする準備に入っています。観光連盟の場合、それぞれの各観光協会、商工会議所など入った23団体の組織をある程度共通の役所型ではないのですが、いいものを出して、例えば湯野浜、温海、湯田川それぞれの持っている独自性をどう出すか求められてくるもので、ある程度こう種類の多い数多くのパンフレットを出している。それから食の関係もいろいろ出しています。ただ先程申し上げたように自然環境から何から素晴らしいが、市民がどれだけ理解して外にアピール出来るかどうか。聞かれた場合にどこに案内するか、全部おいしいからどこの店でも良いという訳にもいかないので、やり方や方向を検討しないと。

○ **早坂剛会長** 私は観光案内所はもう一回見直すべきだと思います。3人もいるのなら、その人達を中心にして、ひとつは東館に置くのもいいと思う。

○ **三浦惇委員** 観光ガイドを集めて何人か常駐させて、そこから派遣する手もある。自転車だけは駅に置いて。

○ **今野毅分科会長** 鶴岡の人でも知っている人あまりいないのではないかな。

○ **三浦惇委員** パンフレットだってどの程度出来ているか分からない人もいるのではないかな。それから観光物産課に来なければ持っていくこと出来ないわけです。たまにガソリンスタンドで小さいパンフを置いているところがあります。

○ **早坂剛会長** 市の観光物産課が中心になって集約していくというのをやらないだろうか。

○ **今野毅分科会長** 例えばガソリンスタンド、SS、ホームセンターどこでもいいかもしれないが、車で来た人が立ち寄れるコーナーがあるといいと思いますが、鶴岡はありますか。

○ **佐藤正廣委員** るるぶ、じゃらんがよく聞かれます。るるぶの庄内ガイドとか良く出来ていると思います。

○ **本間孝夫委員** 分科会のまとめとして何か形として残したい気持ちがあります。パンフレットの件は、本当に実現できれば無駄も無くなるし、全体を案内出来るものが作れる。ぜひやってもらえればと思います。それから早坂会頭に提案ですが、例えば「でがんす」があります。結構知り合いが全国にいて、いろんな人が車で遊びに来ますが、庄内のお土産をどこから買えばいいかという話が必ず出ます。「でがんす」もありますが、そんなに商品が多くないので、物産館を紹介してしまいます。今の観光案内と庄内の特産品を一堂に見られる場所が駅前にもしあれば、凄く変わると思います。両立出来る方法が考えられると思います。物産館はいろいろな商店、加工品を売っていますので、「でがんす」があそこの観光案内と一緒になれば、地域の特産品、藤島、朝日、鼠ヶ関やいろいろな漁業の加工品があります。そういうものが一堂にして見える場所が仮に出来れば、駐車場の設備はしっかり出来て観光案内もしっかりあって、観光については変わると思います。私は間違いなく最初にそこがいいよと紹介出来ると思うし、行けば地域の農産物の加工品、何でも良いものがいっぱいあって買えるということを伝えていく。商工会議所が移動という話も新聞で出ています。そういう可能性があるのかないのか全く分かりませんが、もし可能であれば一緒にした観光案内は効果出てくると思います。

○ **三浦惇委員** 全国、東北の大会、総会とか招致できないか。文化会館が来年か再来年か使われませんが、出来ないものですか。

○ **早坂剛会長** 太平洋側が被災にあい、今日本海側に移っています。今度、柔道大会がある。それから9人制のバレーボール大会もありましたが、スポーツの情報を各競技団体から、どういう大会があるのか。やはり情報です。例えば漁協の大会、民謡の大会何でもいいのです。今コンベンション協会には各業界にいろいろな情報を収集するようにお願いしています。

○ **今野毅分科会長** それは何を開催しても磐石なものがありますよと、提案出来るわけです。この前9人制の全国バレー大会があった時に、第一ホテルでタクシーが来ないと言われ往生したのですが、すごく混んでいました。何かあるとすごい活性化します。駅前にそんな拠点を設け、マリカ東館を活かすことも含めながら、何かを含めて駅前に人を呼ぼうとか、何とか活性化しようみたいなことだって発信としては何も悪くないわけです。

○ **早坂剛会長** 先程荘司さんが言ったけれども、アイデアは本当に若い人を問わず、自分でやりたいというカリスマ的な人を私は外部から連れてきた方がいいと思います。余目にもいるし、女の人が定着して観光何とかにもなっているし、あつみ温泉にも。そういう人から観光の窓口になって企画や情報発信とかをやらせることをしたら違うと思います。市役所の職員は異動があり、2年とか3年で交代しますので、仕事は継続出来るかもしれないけれども継続性がない。そこに来て初めて分かる人も来るから、また一からやり直すことの繰り返しで進展が無いです。是非そういうカリスマを。募集すると結構来るらしいです。

○ **荘司正明委員** アイディアをいっぱい持っている人がいると思います。

○ **今野毅分科会長** 在来の野菜、一村一品と過去の部会でも活発にありましたが、だだちゃ豆の日を8月8日ということで、だだちゃをお父さんイコールパパということで、8月8日をだだちゃ豆の日と制定するのです。

○ **早坂剛会長** この辺の人達はだだちゃ豆は20日過ぎだよと宣伝していますが。

○ **今野毅分科会長** それは白山だだちゃです。

○ **五十嵐吉右衛門委員** 白山だだちゃも、農産物は年間通じて計画、PRして初めて名声も高まりお客さんも来ます。農産物に対して地域がそういう計画性を持ちながら、例えば三瀬の孟宗祭りといったようなことを、現実的に季節的に計画性を持ったらどうかと一点があります。なお、連携しながら、湯田川、田川、温海方面があるので、そういったルートをいっぱいある伝統的な産物、行事を明確化して、パンフレットにしたらどうか。私の考えです。

○ **今野毅分科会長** それらを含めてパンフレットのみ作っても駄目だから、いろいろ有機的に結びつけた発信基地。メディアの部分だって良いわけです。荘司さんが言われる、意欲のある人を募集してもいいわけだから、拠点となるものが欲しい。

○ **五十嵐吉右衛門委員** ひとつにまとめて。いっぱいあっても分らない。

○ **今野毅分科会長** それらの発信基地です。あまりにいっぱいあっても分かりにくい。

○ **荘司正明委員** 商工会議所移転の話がありましたが、地域活性化に触れ良いチャンスなので繋げてもらえればと思い一つ提案ですが、庄内は、先端科学技術が豊富なまちですが、例えば山形市は産業科学館、こども科学館がありますが、庄内には科学館がないのです。できれば子ども達が常に身近な所で科学に触れられるような、面白い子ども科学館を併設した商工会議所を作ってもらえれば。かなり掛かるようですが、山形だけでもかなりの子ども会があって、常に来て見学、体験できる施設があれば、子ども達で活性化になるかと思いますが、文科省や科学推進財団で補助金とかは取れませんか。

○ **今野毅分科会長** 荘司さんが言ったことで、鶴岡のすごい高水準、ハイレベルの世界に誇れる技術を持った会社がたくさんありますが、その技術を紹介する場がないことを含めての話だと私は思いました。

○ **荘司正明委員** 慶應、山大、高専、加茂水族館もありますが、そういうのにちょっとしたミニ水族館を併設したり、考えれば色んなアイデアが。

○ **吉住光正地域活性化推進室長** 商工会議所、文化会館、加茂水族館の話がありました。先端生命科学研究所は鶴岡でPRしています。科学館という名称でないにしても、何か子どもが親しめるような機能をどこかにという感じはあります。しかし、既にスタートしているものもあるし、水族館にしても何年後には建てようとしている状況が実際あります。

○ **早坂剛会長** 毎年11月ですか。鶴岡に進出する企業、大学、高専が自分のところで作っている、研究をしているものを東館で3日間展示します。鶴岡工業博覧会をやっています。

○ **佐藤正廣委員** 医療技術に特化して高研さんとか中心になり、ヒューマンメタボロームさんが入って、当初鶴岡市さんも応援して、一回あの東京で、医療関係者の見本市へ鶴岡市さんのご尽力があつて出られたとおっしゃっていましたが、医療技術がある。もうひとつ今キビソ、鶴岡シルク、あれは繊維組合さん、協同組合さんで、それもまた経済産業省の所管のお金出してホームページで販売している。一生懸命なところ、全国発信の団体ありますが、とにかく鶴岡は横が繋がらない。今の話多分結構ご存知ない方もいると思いますが、末広町に鶴岡シルク株式会社があります。とにかく横が繋がらないのです。

○ **早坂剛会長** 慶應の先端研出てきた32歳位の蜘蛛の研究していた方が、繊維を作ろうという会社を作ってやっている若い方がいるけども、鶴岡は凄いです。

○ **佐藤正廣委員** ウエノさん、ワテックさん、ここしかないという全国シェア、世界シェアの企業があります。

○ **今野毅分科会長** 我々は世界を目指すことは無理ですが、何かひとつ、当初から言われていた御角櫓。やはり、皆の目に見えるものを一緒にやろうというところから、また次に違うものに派生していくのも良いのではないかと話したのですが、今日はいろんな話から東館の在り方、観光に視点をに置いた話で、非常に意味はあつたと思います。まだまだ時間足りないようです。また次回もしくは今日皆さんがお家に帰られたら、言いたかった事をメモにして、今日の事をイメージして11月に向けたものになるようにぜひ次回したいと思います。閉会させていただきます。大変ご苦労様でした。

○ **吉住光正地域活性化推進室長** 今日皆様から出た意見は、重要なテーマありますので分類し、まとめたものを送ります。それで見てください、また次の意見そこからまた発生して具体的に意見として、また継ぎ足していただけるようにいたします。